

黄色の辞典

金城 光政

書物は、そのときどきの記憶を呼び覚ますがゆえに、多くを捨てられずにいる。書棚の下段に平積みされた黄色の辞典もその一冊だ。

四十年ほど前、職業選択に迷っていた二四歳の私は、四ヶ月間だけの受験生となった。近鉄奈良線の小さな駅前の書店で購入した薄っぺらな参考書だけを頼りに、一九七六年当時、全国に六校しかないリハビリテーション養成校の入学試験にチャレンジしたのだ。

「これからはリハビリテーションの時代だ。君はそちらに行きなさい」

そうやって私の迷いを払拭してくれたのは、地域福祉学の重鎮岡本重夫先生、私の指導教官定藤丈弘の恩師であった。大阪の東淀川のマンションの薄暗い書斎で、正座した定藤と私は神妙にこれを聞いた。

定藤は当時、いつでも誰にでも細やかな気遣いをみせる若手の研究者として人気があり、私の十歳年長の指導教官であった。

「キンジョウ、しばらくは禁女だ。これでしっかり勉強せえよ」と、一冊の辞書をくれた。カヴァーが黄色の『新クラウン基本英熟語辞典』であった。

私は、深夜放送を聴きながら、細胞の構造や、生物の発生などの暗記に取り組んだ。しかし、その黄色の辞典は受験には不向きな種類であった。ただ、勉強に疲れた私の頭を癒す手頃な枕としては大いに役立った。

―定藤先生が交通事故で脊髄損傷―

一九七七年一月。受験を終えた私を待っていたのは、思いもよらない知

らせであった。

「おーいキンジョウ、よう来たな。サダトウ先生は死にそうやぞ」
私に心配かけまいとするその関西弁がかえってその症状の厳しさを感じさせ、言葉を失った私の身体を震わせた。

「お前、リハビリの学校に入らへんかったら、破門やからな」
立ち尽くしている私に定藤は、酸素テントの中で浅い息を吐いた。真顔であった。

定藤の寝息が止まってしまおうのではないか。そんな恐怖に怯えながら、私は薄い毛布に包まってベッドサイドで不安な二晩をすごした。

春。大阪府郊外のリハビリテーション専門病院を訪ねた。「合格」という結果を報告すると、「ほれ見ろ、あの辞典が役にたったんや。ちゃんと岡村先生に報告しときや」と笑った。

定藤は、そのときすでに自力では歩けないことを告げられていた。歩けはしないが、上肢の力は残されており、車椅子での生活は可能、という理学療法士の言葉を前向きに捉え、マット上での訓練に励んでいた。

その頃の定藤は、受傷以前よりも輝いた目をしていた。「車椅子で大学に復職する」という強い信念が定藤を支えていた。福祉系の大学でありながら、陰では「障害者は施設に入り、年金生活すべし」という声があった。これが定藤の闘志に火を付けていたのだ。

病院の講堂で定藤の「復職試験」としての模擬講義が行われたのは、事故から八ヶ月目であった。定藤は、ときどき深く息を吸い込みながらも生き生きとしてしゃべった。事故の件も、自由にならない身体のことともにユーモアを交えながら語った。「復職試験」であったはずの会場はいくども笑いが起こった。「障害は健康の欠如ではない」そんな思いがこみ上げ、私は涙が止まらなかった。

その「復職試験」成功の背景には、担当作業療法士による事前準備があっ

た。授業では、黒板の代わりにOHPをセットし、マーカーは手掌に巻きつければOK。また職場では、物的、人的環境を整えれば問題は自ずと解消するとアドバイスしていた。現在では当然のこととして考えられる事柄であった。

若い女性作業療法士の支援は、障害者を排除しようとする大学の教職員たちを黙らせた。助手として立ち会った学生の私は、リハビリテーションのその力に一層魅せられていた。

定藤は、十ヶ月で復職を果たした。そして、招かれた講演では「四肢麻痺で世界最短の完全職場復帰の記録」と宣言した。一九八一年の国際障害者年を前後して、定藤はその活動を積極的に展開。身体障害者の自立生活運動の日本への紹介と、その実践をライフワークとして、多くの人々に影響を与えた。

「沖縄のリハビリは、お前の責任やぞ。それに、沖縄の金城君は元気か。つて岡本先生も心配しとったで」精神科の作業療法士として帰沖した私を定藤は常に気にかけてくれた。

恩師定藤丈弘は、インフルエンザがもとで五七歳で死去。大きな未完のままの死。という評価は定藤丈弘に相応しいと思った。

過日、小春日和に誘われて書斎の整理を行い、書架の最下層に平積みのかしい枕を見つけた。幾分湿ったほこりをぬぐうと、鮮やかな黄色の表紙が蘇った。

(了)